

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

イメージの生命力

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード: イメージ論, 生命力, アルゴリズム, インターネットミーム, 画像認識 作成者: 福本, 直起 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001667

論 文 要 旨

学籍番号	233326	氏 名	福本 直起
論文題目： イメージの生命力			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論文は、20世紀末頃から隆盛した「イメージ論」を重要な参照元とし、なかでもイメージに生命力を見出した2人の論者、H・ベルティンクとW・J・T・ミッチェルに注目しながら、彼らの議論を「生きているイメージ [living images]」論として重ね合わせ、「イメージが有する〈生命力〉とは何か」を探究している。</p> <p>第1章では、先行研究の精査として、ベルティンクとミッチェルの議論を整理している。その結果、彼らはそれぞれ異なった論点（前者は、不在を代理する現前に、後者は、個別の媒体を超えた生存に）にイメージの「生命力」を看取しながらも、イメージに「移住」する能力を認め、その移住の中核として「人間（あるいは人間の身体）」を置く共通点が明らかとなった。</p> <p>第2章では、このイメージの「移住活動」をさらに掘り下げている。イメージは個別のメディアを次々と越境していくがゆえに、消滅を回避し、変化し生き延びながら、繰り返し現前する。その際、人間身体は、観者としてイメージを見つめ、記憶に蓄え、新たなイメージを制作／想像するのみならず、身体それ自体がイメージを発する源となる点において、イメージの移住に重要な役割を果たしている。このような「移住」というイメージの様態は、観者に対する強固な作用と、メディアに対する依存性を示し、イメージが有する「生命力」の証左となる。ゆえに、「生きているイメージ」論は、複層的なメディアが織りなす移住環境に対するイメージの「適応」を論じ得るといえる。</p> <p>前章を踏まえ、第3章では、インターネットミームやメディア・アートを事例として取り上げながら、移住環境としてのサイバー空間に対する、イメージの「適応」を具体的に検討している。そこで明らかにしたのは、サイバー空間においてイメージの移住活動を可能にするアルゴリズム、すなわち、当論文内において「機械の眼」と呼ぶ非視覚的な働きが存在であり、イメージの知覚主体が人間身体から離れつつある今日的な事態である。したがって、イメージは今や、ベルティンクやミッチェルが想定していたような「人間」を中心とした移住とは異なる活動様態を、サイバー空間において獲得しているといえよう。イメージは、私たちが感覚し得ない「機械の眼」の働きによって、生きている。つまり、イメージは、人間の眼差しの下にのみ生じるのではなく、その外側で、新たな移住環境へと適応する「潜在的な生命力」を有するのである。</p>			
キーワード (5語)			
イメージ論、生命力、アルゴリズム、インターネットミーム、画像認識			